

庭がつくる街

暮らしの風景をつないでいく建築

西尾昂紀

庭とは個人がその土地と向き合いつくる風景であり、それは個人のものに止まっているのが現状である。そのような風景が街に連続し、様々な環境の中に居場所があり、どこまでも自分の庭の領域に感じるような、そんな街を構想した。



0 -庭について考える-

庭とはどんな存在だろうか？

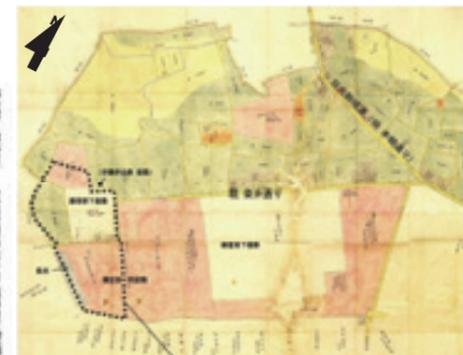
ただ眺めたり、石を置いたり、植物を植えたり、土を盛ったりなど理想に向かって土地と対話するかのような風景が考えた。庭をもちその土地との応答を繰り返すことでその場所に対して愛着を持つことができると考えた。

1 敷地（エリア） 東京都豊島区駒込



2 園芸のまち 駒込

江戸時代には広大な土地を持つ大名の屋敷があり、その庭園をつくるために植木屋が多く存在した。現在の染井通りには多くの植木屋があり、当時は日本最大の植木・花卉のセンターであったと言われている。植木屋も自分の屋敷に多くの苗木を植え、それを育てて売っていた。



(1) 受け継がれる精神

庭の街としてのアイデンティティは今でも引き継がれ、江戸にこの地で生まれたソメイヨシノを街の木として育てたり、各所に花を植えたりなど、街の景観デザインに生かされている。

染井吉野桜の里公園



銀行跡地に住民と行政が話し合っ作られた公園。染井の桜を発信するため、街に桜を咲かせるために苗木が育てられている。育てられた苗木は地元の小学校や、地域の街路に植えられる。住民が主体となって育て管理している。

染井霊園



もともと武家屋敷であった場所を、公共の墓地に変えて、もともとあった桜や個人が自分の墓地の周りを手入れして美しい風景が作られている。

3 変遷 - 開発により失われてしまった庭

江戸時代

通り沿いに植木屋が並び、その奥に苗木を育てる庭を持ち、その奥には斜面状の緑地と谷を挟んで向かいの山からの借景があった。街一帯が自然に覆われていた。



現在

戦後に住宅の開発が進み、もともとできていた庭の風景は失われ、個人が塀で囲った狭いに敷地に小さな庭を持つような風景に変化した。



4 リサーチ

(1) 崖をこの街のcommonsとして捉える-

この街には宅地開発によって生まれた擁壁が街中に広がっている。皆が家の領域内に持つものとして広がっていて、ある種の共通感覚をもたらしている。



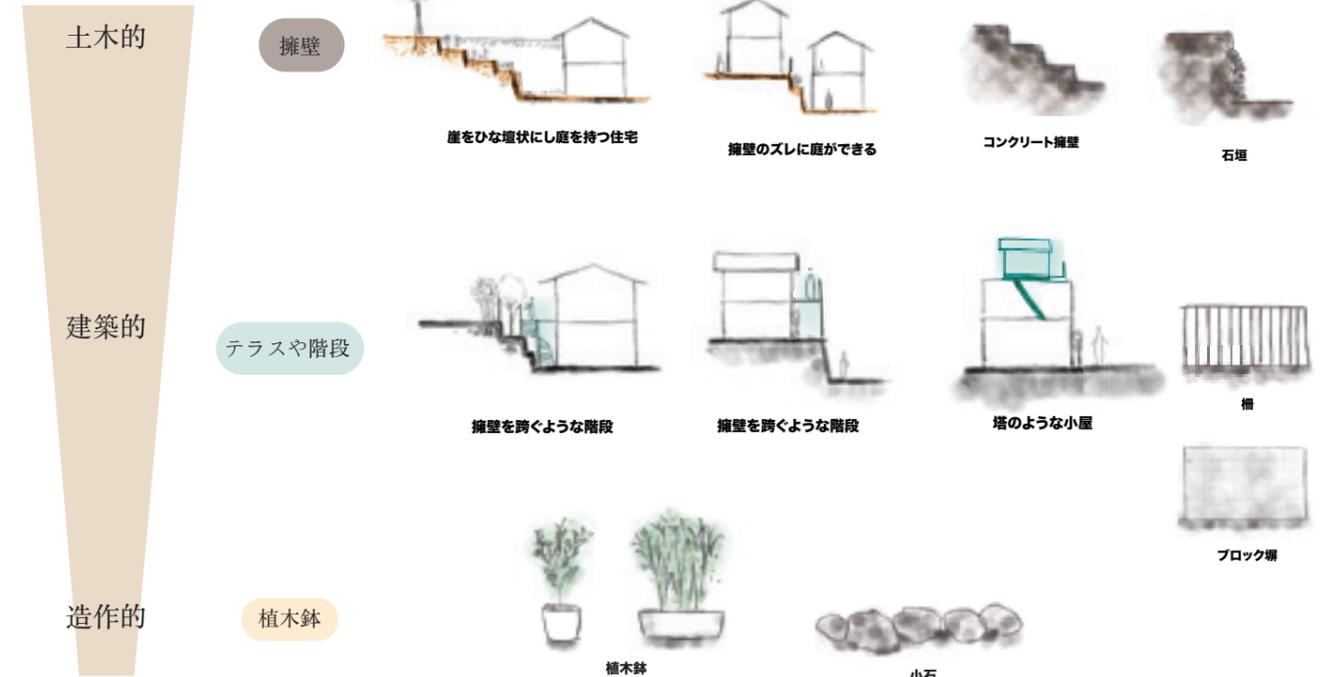
(2) 閉じたオープンスペース-擁壁に囲まれた場-

神社・寺・小学校は宅地開発によって周辺に擁壁や塀が建てられ、閉じられたオープンスペースを作っている。



5 庭の構造-様々なモノを許容する空間

さまざまなスケールに置いて土地との応答が生み出す空間である



様々な事象のモノの集積としての庭



6 断面ダイアグラム 庭をつくるように作る

環境を生み出す擁壁・躯体

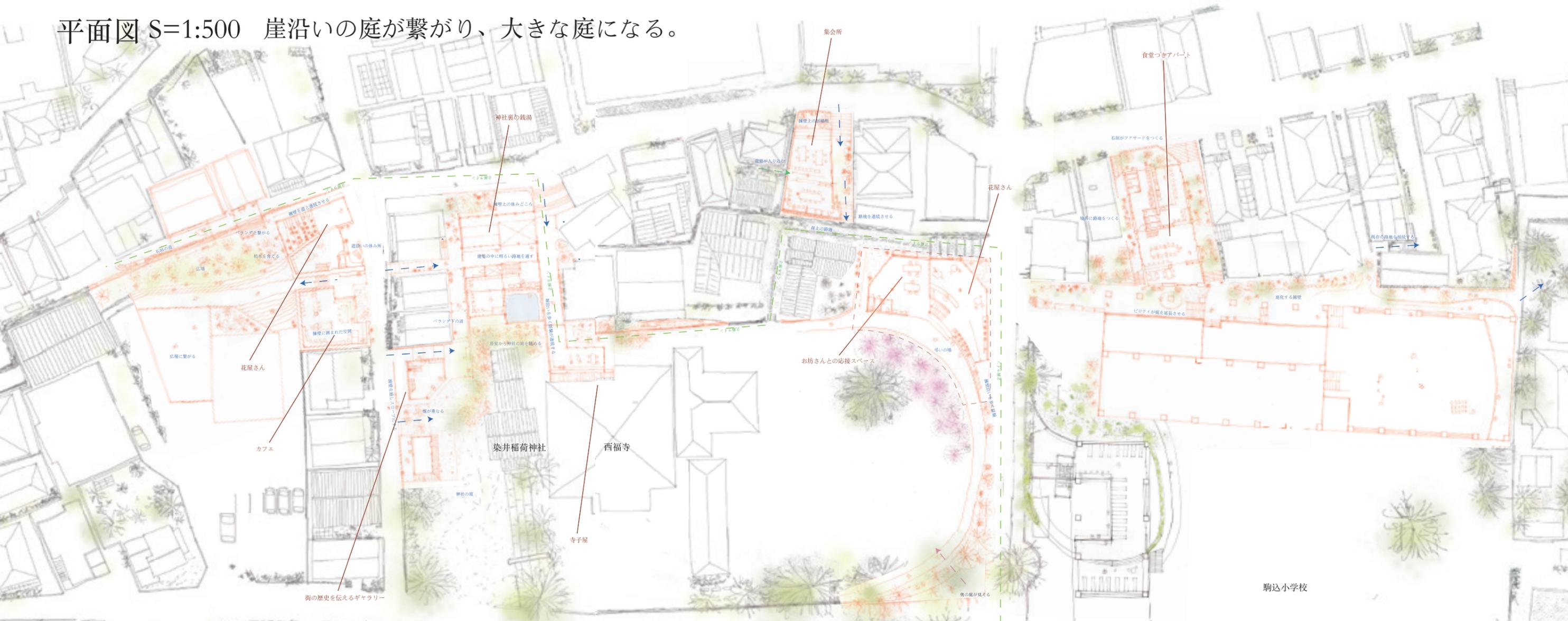
木造の架構をのせ、建築が庭に対して構える



家具が居場所をつくる

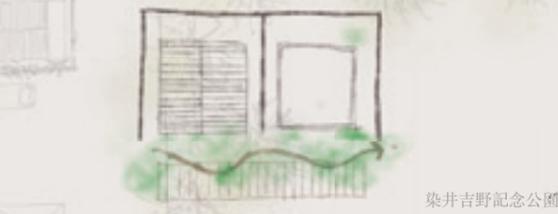


平面図 S=1:500 崖沿いの庭が繋がり、大きな庭になる。



平面ダイアグラム

1 住宅の裏庭をつなぎ、庭の経験を連続させる



3 崖沿いを中心に大きな庭を形成し、街の風景となる

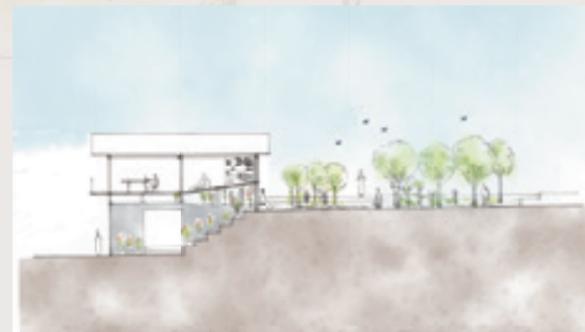
染井吉野記念公園

2 つないだところどころに街の機能が入る

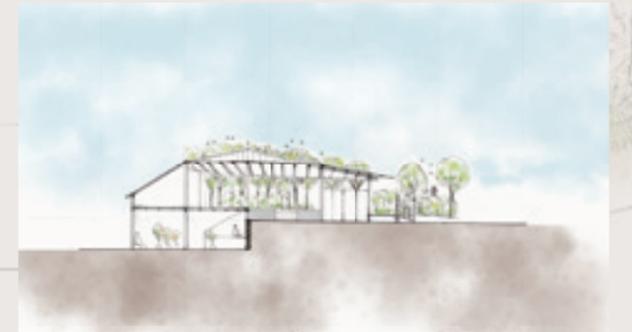


断面図 S=1:500

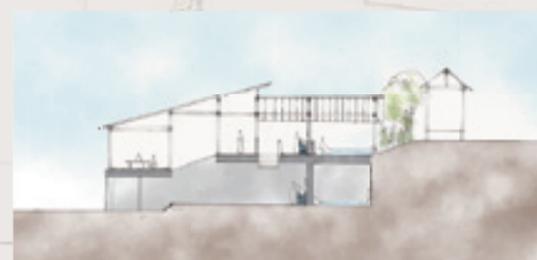
A-A' 花屋 擁壁が壇上になり、奥へと繋がる



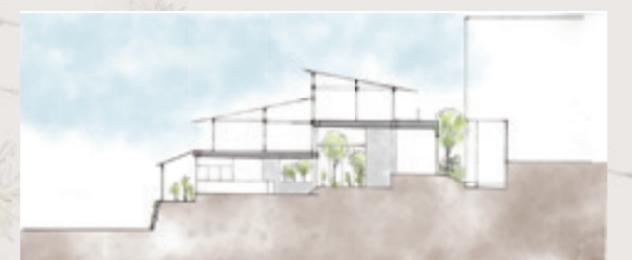
C-C' 弔いの場 既存の環境におおらかな屋根がかかる



B-B' 銭湯 擁壁自体が空間として現れる



D-D' 食堂 持ち上がった躯体が環境に開く



立面展開図 S=1:500 様々な庭の経験が連続し、街の風景となる。



それぞれが庭をもち集合する



通りに対して開く



塀が内部空間に入り込む



桜に対して構える

Comments from Classmates

自分ごとだと捉えることのできる場所がどんどんと広がっていく設計だと思う。個人的な「庭」という場所から出発したのに、自分の生まれたところや出掛けたところ、地球や宇宙にまで思いをはせることができそうだと、ふと感じた。

阿部ほなみ

最初のころからやりたい事にしっかり軸があって、いろいろなアプローチから庭を精力的にリサーチしていた。桜の時期に駒込に行ってみたのだけど、住宅街や斜面に点々と庭が広がっているのを見てにしおが考えているスケールの大きさを知れて良かったし、植物や庭と人の距離の近さ？を感じることができて良かった。いい場所を知っていると思う。今度面白い街を教えてください(笑)

勅使河原大誠

今年は庭の人となったね！(笑) 住宅地を歩いていると勝手に昴紀のことを思い出して、自分の居場所としての住宅地の庭がまちにズルズルとつながっていく風景を連想してしまうようになってしまいました。庭を自分なりに定義付けることができたのは今回の大きな収穫だと思うから、引き続き環境を取り込んだ気持ちの良い建築を作っていくください。昴紀らしさを大事にして頑張ってください！4年間ありがとう！

正林泰誠

西尾のテーマは庭だ。自分の佇む空間に、必ず視線の先に何か見つめるものが欲しいということは自分とどこか共通したように思う。マイペースな彼の気質は庭という世界にどこか現れている気もする。マイペースで嘘が嫌いで、そしてどこか職人肌な彼は、素直すぎて自分とは合わない時もあり、なかなか付き合い辛い時も過去にはあったが(笑) なんだかんだ楽しくやってきたように思う。真っ直ぐなエネルギーをこれからも絶やさずにいる欲しい。アディオス!!!

坂田直哉

こうきの凄く良いなと思うところは、「庭」という興味が2年生ごろから一貫していること。そして、卒制でもずっとそのことを追求していた。これから先考え続けることが定まっている数少ない人だと思う。ただ一方で、毎回の提案や設計が良くも悪くも「こうきらしく」まとまってしまっているように感じていて、卒制も例外ではなかったと思う。気づきであったり興味の部分は繊細でもとても良い感性を持っているのだから、もう少し論理的に自分の提案について思考する側面もあれば、これから先2年間でもっと成長すると感じています。卒制の間はずっと左近山にいて対話する人も限られていたと思うので、もっといろんな人と議論することで視野がさらに広がっていくと思う。

永長穂高